

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年 2 回発行



平成 25 年度秋季企画展『やおの古墳時代－邪馬台国時代のムラとくらしー』から

1. はじめに

25 年度の秋季企画展として、八尾市域の古墳時代初頭～前期前半(3C前半～4C前半)を対象とした『やおの古墳時代－邪馬台国時代のムラとくらしー』と題した展示を行いました。

展示では、「Ⅰ 邪馬台国時代の河内平野」「Ⅱ 邪馬台国時代の市域のムラ」「Ⅲ 邪馬台国時代の土器」「Ⅳ 邪馬台国時代の地域間交流と外来系土器」「Ⅴ 邪馬台国時代の中河内地域の役割」の小題を設け、わが国の歴史を語るうえで大きな変換点となった激動の邪馬台国時代(3C前半～4C前半)の八尾市域の集落動向を通じて、中河内地域の役割を考えてみました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。

2. 邪馬台国時代(3世紀～4世紀前半)の市域の遺跡

河内平野は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた東西約 11 km、南北約 20 kmに広がる沖積平野です。古墳時代初頭(3C初頭)には、平野北部(大阪市北東部・大東市・四條畷市・東大阪市中西部)を中心に河内湖があり、北からは淀川水系、南からは大和川水系の河川が注ぎ、上町台地北端付近で西方の瀬戸内海と繋がっていました。当時の湖岸の南側は、東大阪市中南部の意岐部・西岩田遺跡(岩田町 2～4 丁目)付近と推定されています。

河内湖南岸の平野部周辺の発掘調査で、平野内を南北に流れ河内湖に注ぐ「小阪合分流路」・「萱振分流路」・「久宝寺分流路」と呼ばれる河川の存在が確認されています。市域の平野部では、邪馬台国時代の遺跡がこの主要河川沿いに数多く成立しています。その多くの遺跡からは、他地域から持ち込まれた外来系土器と呼ばれる土器類が多数出土していることから、全国各地の多くの人達との交流が頻繁に行われたことがわかります。

久宝寺遺跡で発見された外洋航海が可能な準構造船(3C中葉)の発見は、当時の中河内地域が河内湖を介した水上交通の要衝の地で、西方地域からの到着点であるばかりでなく、東方の大和盆地南東部への「人」「物」「情報」を繋ぐ中継地の性格を果たした地域であったことを物語っています。

表1 弥生時代後期～古墳時代前期の時期区分

| 年代 | 世紀 | 時代 | 時期 | 細分 | 土器様式 |
|-------|------------|------|----|------------|--------------|
| AD100 | 2世紀 | 弥生時代 | 後期 | 後半 | 畿内第V様式(新) |
| 200 | 3世紀 | | | 初頭 | 前半 |
| 300 | | 古墳時代 | 前期 | 後半 | 布留式(古)-布留Ⅰ・Ⅱ |
| | 前半 | | | 布留式(中)-布留Ⅲ | |
| 後半 | 布留式(新)-布留Ⅳ | | | | |

*庄内式・布留式分類は原田昌則1993『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』による

邪馬台国時代(3C前半～4C前半)の八尾市域の集落動向を通じて、中河内地域の役割を考えてみました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。



図1 八尾市域の邪馬台国時代のムラ位置

目次 ◆平成 25 年度秋季企画展『やおの古墳時代－邪馬台国時代のムラとくらしー』から(p 1～3)、
◆平成 25 年度のイベントから(p 3) ◆よろず考古学コラム第 10 回(p 4)、イベント案内／編集後記(p 4)

3. 邪馬台国時代の市域のムラ -河内湖に注ぐ大川沿いに成立した集落-

1) 小阪合分流路周辺の集落

①東郷遺跡周辺のムラ(光町、桜ヶ丘、北本町)

東郷遺跡では、遺跡東部を中心に古墳時代初頭～前期前半(3C初頭～4C前半)の集落が見つかっています。集落は弥生時代前期～後期前半(前3C～1C後半)まで存続していた河川(東郷分流路)を中心に成立しており、基本的には兩岸の自然堤防を中心に居住域、流路跡部分に墓域・生産域が設けられています。

〈初頭前半(3C前半)〉の居住域は、居住域A・Bの2箇所で見出されています。居住域Aに関連する墓域は、墳墓が2基検出された墓域A、生産域は南部に隣接し、水田を中心とする生産域Aが考えられます。居住域Bは、居住域Aの南東約350mに位置します。小規模な居住域で、生産域や墓域との関係は明確ではありません。

〈初頭後半(3C中葉)〉の居住域は、居住域A・B間を中心に、たてある 竪穴住居や掘立柱建物を中心とする居住域Cです。居住域Cに関連する墓域は、墓域Cと東に隣接する墓域Bが考えられます。生産域は生産域Aとの関係が推定される他、居住域Cの南部一帯に生産域である水田が広がっていた可能性があります。

〈前期前半(3C後半～4C前半)〉の居住域は、東部を中心に南北に広がる居住域Dと西部の居住域Eがあります。墓域は、墓域B・Cとの関係が推定されます。生産域は、生産域Bが想定され水田の他、畑作に伴う畝溝群うねみぞぐちが検出されています。

②小阪合・中田遺跡周辺のムラ(若草町、青山町、小阪合町、中田、刑部、八尾木北ほか)

小阪合・中田遺跡では、遺跡範囲の中央部を緩やかに蛇行して南から北に流れる、小阪合分流路兩岸の自然堤防上を中心に集落が成立しています。これまでの調査成果から、小阪合分流路は、川幅が170m前後、深さ約4mの大川であったと推定されます。

〈初頭前半(3C前半)〉の居住域は、小阪合分流路の左岸に5箇所、右岸に5箇所あります。

〈初頭後半～前期前半(3C中葉～後半)〉の居住域は、左岸に6箇所、右岸に7箇所が分散して分布しています。そのうち、中田遺跡(刑部3丁目)で見つかった「刑部土坑」からは吉備地方の特徴を持つ大量の土器や最古段階かわちがたしやうないしきかめの河内型庄内式甕が出土しています。これらの資料は、河内型庄内式甕の成立過程のみならず邪馬台国時代の中河内地域の社会状況を考えるうえで重要な鍵をにぎっています。

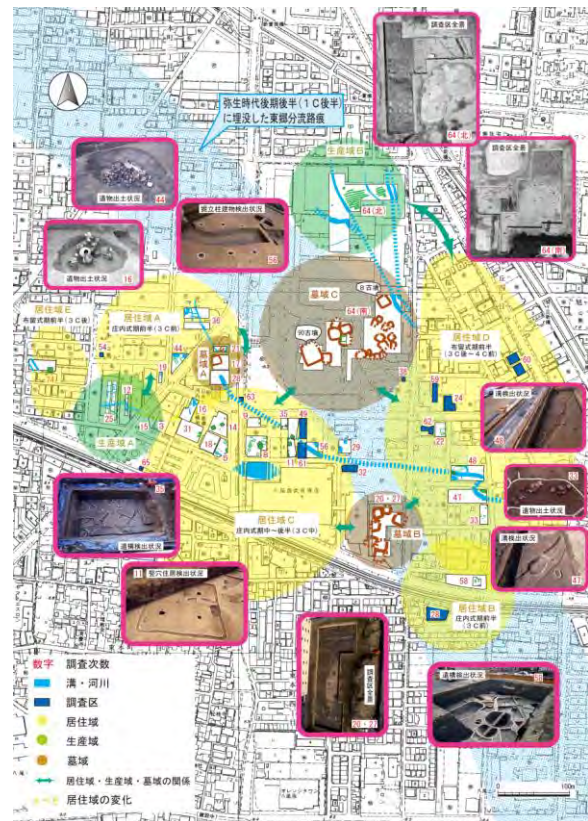


図2 東郷遺跡の邪馬台国時代のムラ

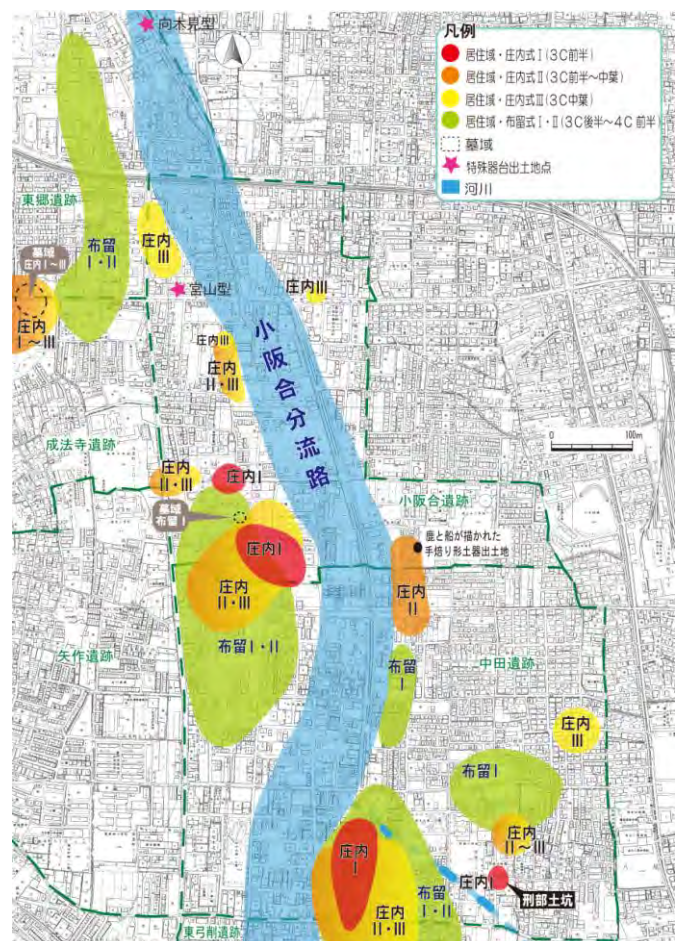


図3 「小阪合分流路」と小阪合・中田遺跡のムラ

2) 久宝寺分流路周辺の集落

①久宝寺遺跡周辺のムラ(神武町、久宝寺、北久宝寺、南久宝寺、龍華町、大阪市加美)

JR久宝寺駅の東付近を南から北に流れていた久宝寺分流路は、川幅が約150mを測る大規模河川で、この河川流域の自然堤防上や後背湿地を中心に集落が広がっています。集落の存続時期は、古墳時代初頭～前期前半(3C初頭～4C前半)で、古墳時代前期前半(3C後半)をピークに、居住域が激減する傾向が認められます。これらの集落から、吉備・山陰・播磨・阿波・讃岐・東海・南関東系の他、朝鮮半島系の土器類が出土しており、地域間交流が朝鮮半島にまで及んだことを物語っています。久宝寺遺跡で発見された準構造船から、河内湖から瀬戸内海への海上交通路のための港湾的な役割を果たした集落群であった可能性があります。墓域は、墳墓が主体で、加美遺跡東部と久宝寺遺跡南西部で約130基が見つかっています。古墳時代初頭前半(3C初頭)から造墓が始まり、古墳時代初頭中葉～後半(3C中葉～後半)にピークを迎え、古墳時代前期前半(4C前半)以降、墳丘規模の拡大と造墓数の激減傾向が認められます。生産域としては、久宝寺分流路から導水した水路に沿って水田や畑が設けられています。

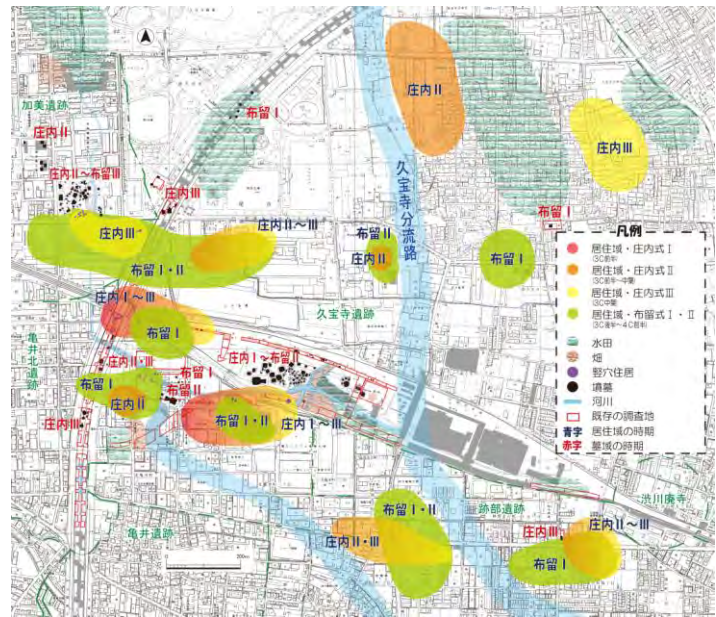


図4 「久宝寺分流路」と久宝寺遺跡周辺のムラ

4. 邪馬台国時代における土器様相と河内型庄内式甕の成立

1) 庄内式土器様式と河内型庄内式甕

大阪府豊中市の庄内遺跡出土の古式土師器を標識とする「庄内式土器」は、古墳時代初頭の土器様式で、その存続期間は土器編年や年輪年代測定法等から概ね西暦200～270年前後と推定されています。なかでもこの土器様式を代表する器種として「庄内式甕」があります。「庄内式甕」には、河内平野を中心とする「河内型庄内式甕」と大和盆地南東部を中心とする「大和型庄内式甕」があり、共に体部内面にハラケズリ技法を用いることにより薄手で丸底を志向する甕ですが、体部外面のタタキ方向などの違いが認められています。なかでも、八尾市周辺で生産された「河内型庄内式甕」は庄内式期後半(3世紀中葉)に大量に生産され西日本の各地に流通しました。

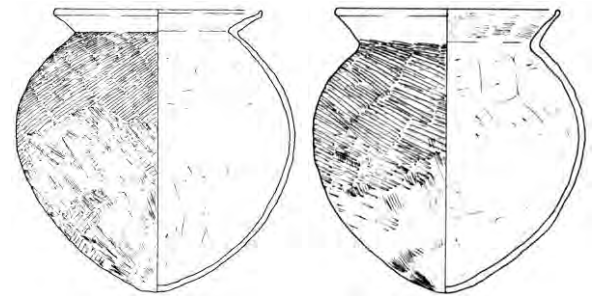


図5 河内型庄内式甕(左)と大和型庄内式甕(右)
《東引削遺跡第4次》〔庄内式古相〕

平成25年度のイベントから

●秋季企画展関連講演会の開催

2013/10/27(日)、2014/1/26(日)

秋季企画展「やおの古墳時代-邪馬台国時代のムラとくらし-」に関連して、「邪馬台国時代における中河内地域の集落とその役割について」、「邪馬台国時代の土器様相と地域間交流について」と題した講演会を2回開催しました。多くの市民の方々が参加され、講演後に数多くの質問が寄せられるなど、邪馬台国時代に対する興味・関心の高さを改めて実感しました。



●大人のための考古学入門講座

2014/2/8・15・22(土)

大人を対象とした考古学入門講座を行いました。3日間にわたり、「時代を探る技術」「時代を測る物差し」「道具から時代を見る」と題した体験学習を行いました。

発掘調査の方法や地層の見方、本物の土器や石器を使った体験学習や鏡製作を通じて原始・古代を体感されたことと思います。



おさかべどころ かわちがたしょうないしきかめ
刑部土坑出土資料と河内型庄内式甕

刑部土坑は昭和53(1978)年に中田遺跡(刑部3丁目)の調査で発見され、古墳時代初頭前半(3C初頭)の古式土師器が約70個体出土しました。この資料が注目されたのは、土器類の大半が吉備系の土器である点や、その中に河内型庄内式甕の最古型式のものが含まれていた点によります。これらの資料は中河内地域の古墳時代初頭前半(3C初頭)の庄内式土器様式の標識資料として、学史にその名前を残しています。



写真1 刑部土坑出土遺物

①刑部土坑出土資料にみる河内型庄内式甕の成立

河内型庄内式甕は、これまでの研究から弥生形甕(V様式甕)をベースとしたA型式と庄内式甕として確立したB型式の二系統の型式変化が認められ、それらを合わせて最古(成立期)→古(完成期)→中(盛行情)→新(衰退期)の4段階の変遷が認められます。そのうち、刑部土坑からは、最古(成立期)の在地系A1型式が出土しており、河内型庄内式の成立に関連した重要な資料を提供しています。以下、最古(成立期)から古(完成期)の様相を解説します(図6参照)。

〈最古段階(成立期)〉体部外面成形にタタキ技法を用いる畿内第V様式甕と吉備地方の内面ケズリ技法とが融合した折衷型のA1型式と、連続タタキ技法で製作され河内型庄内式甕として確立したB1型式が存在します。分布の範囲は小阪合・中田遺跡周辺および市域西部の久宝寺遺跡一帯で、当時の主要河川である小阪合・久宝寺分流路の流域で成立したようです。成立期の河内型庄内式甕は平底の底部で、胎土に生駒西麓産を示す角閃石を含むものと、含まない在地産があります。

〈古段階(完成期)〉この時期は、球胴化が進み底部が尖底を持つA2型式・B2型式に変化しています。この期以降、生駒西麓産のB2型式が成立し、以後この型式が大半を占めるようになります。

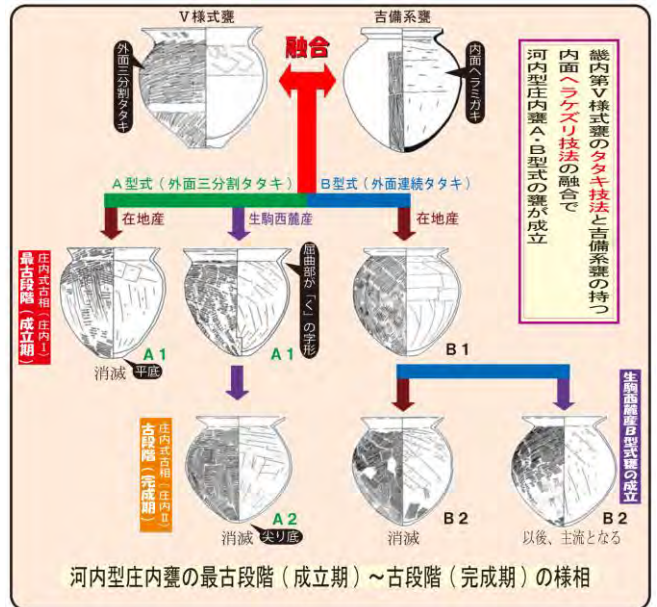


図6 河内型庄内式甕の成立期から完成期の推移図

編集後記

我々の業界では、土器復元の接着剤として「セメダインC」を主に使用している。

この接着剤の商標名は創業者が1923(大正十二)年に考案した造語で、当時売っていた英国製の「メンダイン」を市場から攻めだす思いを込めて「攻め出せ、メンダイン」がその名前の由来になったと言われていた。創業時の「セメダインA」から改良され現在は「セメダインC」に変化している。我々は、このロングセラーの接着剤を使用して、創業者の「攻め」の思いとは逆の気持ちで、文化財を永く守っている。

〈MH〉



イベント案内

- ◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収蔵品—」
内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の出土遺物を中心に展示
期間：平成26年2月26日(水)～6月13日(金)
時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)
休館日：土、日、祝日
- ◆講演会等「やお・埋蔵文化財トークーあの遺跡・遺物は今—」
演題：跡部銅鐸発見から25年—八尾市域出土の銅鐸と弥生文化—
講師：西村公助(公財)八尾市文化財調査研究会
日時：平成26年5月25日(日)午後1時30分～(先着30名、資料代200円)



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 第10号』

発行：2014年3月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター

(編集：公益財団法人八尾市文化財調査研究会)

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2 TEL・FAX072-994-4700

URL http://www.kawachi.zaq.ne.jp/zyao_maibun/center/

E-mail maibun_zyao@kawachi.zaq.ne.jp